

collage house



動物は習性を必ず持っている。鳥には実や虫を食べる・巣を作る・高いところに留まる。ネコには狭い場所を通り抜ける・垂直方向に移動する、ヒトには回避などの平行移動を基本とする習性がある。これらの習性のコラージュから成る家こそが、個々の習性に関心を抱き過ごす領域をそれぞれに与える「太っ腹」を体現した愛のある家となる。



長崎市寺町は、長屋の区画を活用して作られた地方都市である。建物どうしの間隔が狭いことや、電線が張り巡らされたことから、長年にわたり猫や鳥が住みついてきた。しかし、急激な都市開発や動物への対策が進行し人間の住む場は持続的に与えられるもの、動物の住む環境は劣悪化が進むばかりで、動物が追い出されつつある。

動物愛の家

太っ腹な人には愛がある。愛とは、個々における異質性を感じ関心を抱くことであると定義されている。つまり、太っ腹な人は他人と価値観が異なる場合であったとしても、それがその人の良さであり、特性であると常に考えているのではないだろうか。こうした太っ腹な人の「愛」を題材として都市・家について考えた。

現在の都市や家には動物に対する無慈悲さを顕著に感じる。鳥が電線・木に留まることを防ごうとしたり、野良猫を施設へ送り処分したりする。こうした人間以外の異質性を持つ動物が排除される状況にあり、愛はない。

ヒト・動物が単に共生しているということではなく、家が個々の特性に関心を抱き、1つの場の中で過ごす領域を与えることがそれぞれに対する太っ腹であると考えた。こうした家が都市の考え方を直し、愛のある都市へと変えていくことを期待する。

